

高等学校「古文」授業における  
文化史的観点導入の試み（２）  
—『平家物語』における寺院縁起記事を例として—

源 健一郎

四天王寺大学紀要  
大学院 第16号  
人文社会学部・教育学部・経営学部 第55号 2013年3月  
短期大学部 第63号  
(抜刷)

## 高等学校「古文」授業における文化史的観点導入の試み(2) —『平家物語』における寺院縁起記事を例として—

源 健一郎

高等学校における新カリキュラム科目「古典B」における授業実践案を提示する。古典文学研究の現在的問題意識を、高等学校における古典学習に活かす試みでもある。今回も文化史的観点を導入しながら、寺院縁起記事を通じて『平家物語』の読みを深めることを目的とする構成である。生徒たち自身が主体的に考え、日本史学習との関連についても実感することができる内容となるよう心がけた。1・2節において、学習指導要領との関連、及び古典文学研究との関連について述べた後、3～7節において、導入・展開・総括に区分した授業案について概説する。

キーワード 古典文学 国語教育 寺院縁起 平家物語

### はじめに

高等学校「古文」授業において、歴史物語や軍記物語のような歴史的事実を描く物語を教材とする際、教授者は生徒たちに、ある程度の日本史的知識を予め提示し、作品の読解に活かしていく必要がある。特に、中世古典文学作品を扱う場合、日本文化史的分野のうちでも、宗教史的、思想史的知識を活用することが必要とされてこよう。

『平家物語』という作品については、叙事的側面に目が行きがちであろう。しかし、琵琶法師が語ったという事実からも窺われるように、物語による歴史解釈や、物語の進行原理には、仏教的観点が色濃く投影されている。華々しい合戦の場面ばかりが、『平家物語』の世界ではない。仏教的価値観が読み取られる場面も視野に入れてこそ、生徒たちは『平家物語』をよりよく理解することになるだろう。ただし、そのためには、高等学校「日本史」の教科書に記述された解説内容(文化史・思想史分野)も視野に入れ、相互に補いながら理解を進められるよう工夫する必要がある。

また、『平家物語』には、多くの諸本(バージョン)が伝わっていることにも留意したい。「国語」(「古文」)教科書に載せられる『平家物語』は、たいていの場合、覚一本であるが、本授業案では、他の諸本も教材として扱うこととする。そうすることで、仏教的価値観といっても、『平家物語』諸本ですべて画一的であるわけではなく、それぞれのテキストの上に多様な立場が反映していることが理解されるであろう。それは、古典の時代の〈現実〉が、〈物語〉に何を求めていたのか、生徒たちに考えさせる契機にもなるはずである。

## 1 学習指導要領との関連

本授業案が授業実践を想定しているのは、「古典B」である。高等学校学習指導要領には、「古典B」の目標として「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。」(第2章第1節「国語」第2款第6「古典B」1「目標」)と掲げられる。本稿の試みは、このうち、特に下線部の内容に呼応する授業案となる。

本授業案のポイントは、以下に挙げた①～③の3点である。それぞれが学習指導要領、および同解説(注1)とどのような関連をもつのかについて示しておきたい。関連の深い内容には下線を付しておいた。

①『平家物語』における物語的歴史叙述の姿勢について考えること。特に、時代や権力の行方は、人為的な戦争によってのみ左右されるものとしてではなく、仏教的価値観が影響するものとして構想されていることを読み取る。

### 【学習指導要領】

第2章第1節「国語」第2款第6「古典B」2「内容」

(1) 次の事項について指導する。

イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。

ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

エ 古典を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果を発表したり文章にまとめたりすること。

### 【学習指導要領解説】

国語編第2章第6節「古典B」2「目標」

古典は、先人が何を感じ何を考えたのか、いかに生きたのかということを教えてくれる。古典の学習を通して古典の豊かな世界に触れ、ものの見方、感じ方、考え方を広げ深めるとともに、古典の学習に主体的に取り組むことによって、一層古典に親しむ態度、我が国の伝統と文化を尊重する態度を身に付けることができる。

国語編第2章第6節「古典B」3「内容」

(1) 指導事項

ア 語句の意味、用法及び文の構造を理解することに関する指導事項

特に、文章を読む中で、文脈に即して意味や用法を習得させる指導や、書き手の意図や文章中の人物の心情などを、語句を手掛かりに場面や状況の展開からの的確に読み取り、作品の理解につなげていく指導を工夫することが大切である。

イ 内容を的確にとらえることに関する指導事項

内容を間違いなく把握するためには、文脈や段落相互の関係を踏まえ、文章の

構成や展開を正しく読み取る必要がある。

- ウ 思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすることに関する指導事項

古典には、書き手や文章中の人物の「人間、社会、自然などに対する思想や感情」が、書かれた時代や環境の違いによって、様々に表現されている。（中略）  
古典に表れた様々な思想や感情を的確にとらえることは、生徒の「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること」につながる。

(2) 言語活動例

- ウ 古典に表れた人間の生き方や考え方について話し合う言語活動

「古典に表れた人間の生き方や考え方など」は、話し合うための話題を例示している。古典には、現代とは異なる人間の生き方や考え方が述べられていたり、今と変わらないものが述べられていたりする。それらをとらえることが、「文章中の表現を根拠にして話し合うこと」の前提となる。例えば、中世の無常観などについての文章を読んで、現代の視点も含めて話し合ったり、中国の思想を読んで、日本への影響などを身近な例を取り上げつつ話し合ったりすることは、古典に表れた思想や感情を具体的に考える契機となり、意義ある学習となる。

国語編第２章第６節「古典Ｂ」４ 内容の取扱い

(4) 教材に関する事項

- ア 取り上げる教材

「古典Ｂ」では、文章の種類や類型、形態に偏りなく、幅広い範囲で教材を取り上げ、古典の多様な世界に触れさせるということである。「長短や難易などに配慮」するとは、短く平易なものがよいということではない。ある程度まとまった量の教材を読むことで、古典を読む能力が養われるという側面もある。古典を読む能力を養うためには、生徒の発達の段階や指導の時期に即応して、長短難易様々なものをバランスよく取り上げ、その配列を工夫するなどの配慮が必要である。

- ②『平家物語』諸本の比較・対照を通じて、一つの物語は様々な手を加えられえるものであって、その際に、多様な考え、思想的立場が介入する場合があることを理解する。

【学習指導要領】

第２章第１節「国語」第２款第６「古典Ｂ」２「内容」

- (1) 次の事項について指導する。

- エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。

- (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

- イ 同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。

- ウ 古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章中の表現を根拠にして話

し合うこと。

【学習指導要領解説】

国語編第2章第6節「古典B」 1 「性格」

「古典B」では、ある程度幅広く古典を取り上げ、かつ言語文化の変遷について理解を深めることとしている。「国語総合」や「古典A」における古典に関する指導には、授業時数や教材の点でおのずと限りがある。したがって、「古典B」において様々な教材を系統的に取り上げ、ある程度幅広く指導することは、古典を読む能力を養い、古典についての理解や関心を深める上で効果的であるとともに、古典の価値について考えを深め、我が国の文化の特質、我が国の文化と中国の文化との関係などについて考える上でも有効である。

国語編第2章第6節「古典B」 3 「内容」

(2) 言語活動例

イ 読み比べたことについて説明する言語活動

「読み比べ」することで、生徒は、文章を課題意識をもって主体的に読むことができる。「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章など」は、読み比べる文章を選ぶ視点を例示している。例えば、書かれた時代は異なるが、同じ題材を取り上げた文章を読み比べることで、時代を超えて我が国の文化の底流にある、ものの見方、感じ方、考え方に触れることができる。一方、同じ時代に同じ題材を取り上げた文章を読み比べることで、文章から受けるイメージの違いを感じ取ったり、書き手の意図による違いを見いだしたりすることもできる。さらに、読み比べたことについて「説明する」ためには、分かったことや考えたことをまとめることも必要となり、一層文章の理解を深めることにつながる。

国語編第2章第6節「古典B」 4 内容の取扱い

(4) 教材に関する事項

ア 取り上げる教材

「言語文化の変遷について理解を深める」は、例えば、古事記、日本書紀、万葉集など漢字のみを用いて表記された作品から仮名文字が用いられるようになった作品へとといった文字表記の変遷、女性文学から隠者文学、庶民文学へとといった文学の担い手と思潮の変遷などを理解したり、軍記物語の文体に漢文訓読の影響を見いだしたり、俳諧の学習においてその成立に至るまでの和歌、連歌かいの歴史を通観したりというように、読むことの学習と関連して言語文化の変遷について理解を深めるということを示している。

- ③源平合戦の歴史的事実を描く『平家物語』のなかに、本筋とは関わりの薄い傍系説話（寺院縁起）が取り込まれ、それによって物語の構造が重層化していることに気付き、発表し合う。

【学習指導要領】

第2章第1節「国語」第2款第6「古典B」 2 「内容」

- (1) 次の事項について指導する。

イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

エ 古典を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果を発表したり文章にまとめたりすること。

#### 【学習指導要領解説】

##### 国語編第２章第６節「古典Ｂ」１「性格」

「古典Ｂ」では、ある程度幅広く古典を取り上げ、かつ言語文化の変遷について理解を深めることとしている。「国語総合」や「古典Ａ」における古典に関する指導には、授業時数や教材の点でおのずと限りがある。したがって、「古典Ｂ」において様々な教材を系統的に取り上げ、ある程度幅広く指導することは、古典を読む能力を養い、古典についての理解や関心を深める上で効果的であるとともに、古典の価値について考えを深め、我が国の文化の特質、我が国の文化と中国の文化との関係などについて考える上でも有効である。

##### 国語編第２章第６節「古典Ｂ」３「内容」

###### (1) 指導事項

エ 古典を読み味わい、作品の価値について考察することに関する指導事項

古典には、書き手や文章中の人物の思想や感情が、それにふさわしい言葉で表現されている。「古典の内容や表現の特色を理解して読み味わう」とは、そのような文章の修辞、文体など表現の仕方の特色をとらえ、思想や感情などがどのように表現されているかを理解し、巧みな描写、繊細な表現、簡潔な語調などを味わうことである。

###### (2) 言語活動例

エ 課題を探究し、成果を発表したり文章にまとめたりする言語活動

科目の性格に応じて、探究する対象を「古典を読んで関心をもった事柄など」としている。成果を文章にまとめることについては、「現代文Ｂ」では表現に関する指導事項の言語活動例であることも考慮して「報告書や論文集などに編集」とすると具体的に示しているのを、ここでは「文章にまとめ」としている。

## ２ 日本古典文学研究の動向との関連

『平家物語』に対する文化史的研究、特に思想的側面については、有名な序章「祇園精舎」から想起される無常思想に関する分析が、ながらく主流であった。しかしながら、一九七〇年代以降、日本史研究（特に仏教史）、思想研究（特に仏教学）における成果と有機的に関係付けられながら、物語生成の背景にあった仏教思想が、大枠としてではなく、仏教諸宗・諸門流に特徴的な經典解釈や、その言説の詳細に踏み込みながら解明されていくこととなった。その代表的研究者が牧野和夫氏である。（注２）

こうした問題意識は、一九九〇年以降も、『平家物語』と唱導との関わりを多角的に分析することをテーマとする研究者に継承されている。特に牧野淳司氏が、いわゆる「四箇大寺」の枠

組みに着目し、権門寺院相互にやりとりされた訴訟文書の分析を通じて、『平家物語』諸本生成の背景に、仏教的イデオロギーの対立を透かし見たことは斬新であった。(注3)筆者自身も、あたかも対抗するかのように表される『平家物語』諸本における寺院縁起のあり方に着目したり、特定の偈頌の各宗派における認識と『平家物語』諸本の関係を分析したり、『平家物語』諸本生成時期における熊野修験教団の活動について考察したりすることで、同様の問題意識を共有してきた。(注4)

また、本授業案で取り上げる得長寿院造営・供養記事は、上述したような近年の研究状況を先取りする形で、すでに一九七〇年代から断続的に取り上げられ続けてきた対象でもある。『平家物語』冒頭に位置するという構想上の問題と、特異な宗派的主張が持ち込まれ得る物語の生成環境との関係について、様々な観点から問題が提起されている。(注5)

以上のように、現在の『平家物語』研究においては、物語生成の基盤、あるいはその環境を明らかにするために、仏教史学的研究における成果を積極的に取り入れ、また、相互に情報を共有する状況が一般化しつつある。本授業案で扱う事例についても、そうした素材になり得るものではあるが、高等学校「古文」授業において、仏教史的知識を多く扱うことには無理があるだろう。先に触れたように、「日本史」教科書における歴史叙述を参照することによって、生徒たちの理解を深め、現在の『平家物語』研究の一端に繋がるような問題意識を抱かせることも、本授業案における一つの目的にしたい。

### 3 導入一覽一本『平家物語』巻第一「殿上闇討」の紹介

まず、本授業で取り上げるのは、巻第一「殿上闇討」の一節である。『平家物語』冒頭、有名な序章「祇園精舎」の次に配される章段である。

源平合戦を対象とする『平家物語』の内容について、生徒たちには、冒頭から最後に至るまでもすべてが合戦記事である、といった誤解があるかもしれない。実際には、合戦記事は巻七・八・九・十一に集中的に現れるものであり、その他の巻では、事態の推移に従って散発的に描かれる程度である。むしろ物語は、合戦に至る時代背景や、人々の思惑、権力者の動向などに筆を費やすのである。

本章段もそうした章段の一つであり、平家の栄華を確立した人物、平清盛が成功する陰に、父忠盛の功績があったことを物語るものである。忠盛は、貴族社会における武士への冷たい視線に堪えながら官位を昇進させた。その過程で彼に課された責務が、王権の最高権力者、鳥羽院に命じられた大寺院、得長寿院の造営であった。王の力が、その治世において万全に機能するためには、仏の力（仏法）と相依相即の関係になければならないと考えられていた時代である。千一体ものの観音像を安置する得長寿院造営の成否は、忠盛のみならず、平家一門の栄達のためにも必ず成し遂げなければならぬ一大事業であった。その状況を『平家物語』は次のように描いている。

覚一本『平家物語』巻第一「殿上闇討」

忠盛ただもり備前守かみたりし時、鳥羽院ぎよがんの御願、得長寿院を造進して、三十三間の御堂をたて、一千  
一体の御仏をすへ奉る。供養けんじやうは天承元年三月十三日なり。勸賞けつこくには関国を給ふべきよし、  
仰せ下されける。折節、但馬国たじまのあきたりけるを給ひにけり。上皇、御感ぎよかんのあまりに内の昇  
殿をゆるさる。忠盛、三十六にてはじめて昇殿す。雲の上人、これをそねみ、同じき年の十  
二月二十三日、五節とよのあかり豊明せちえの節会の夜、忠盛を闇討ちにせむとぞ議せられける。

覚一本等、いわゆる語り本系諸本では、このようにごく簡略な叙述である。しかしながら、その功績によって、平家一門で初めての昇殿を果たしたという点に、得長寿院造営の意義ははっきりと物語られていることになる。（注6）もっとも、成り上がり者である武士、平家の棟梁忠盛が昇殿を認められた衝撃は大きく、物語にはこの後、忠盛を排斥しようと企む貴族たちの策略が描かれることになる。そこでも、忠盛は知恵と機転によって難を逃れ、一門栄達のための地歩を固めたのであった。

生徒たちには、まず、一般的な『平家物語』（覚一本）（注7）の本文読解を通じて、得長寿院の造営が私的な営みではなく、国家にとって重要な事業であり、それゆえに、それに携わった忠盛、および平家一門の先行きに重大な意味を持つものであったことを確認させたい。平安仏教が鎮護国家を旨とするものであったことについて、「日本史」の教科書で確認させてもよいかもしれない。

ただし、それほどの大事業であったわりには扱いが小さい、という印象を持つ生徒もいるであろう。そうした気づきが重要である。『平家物語』にはたくさんの諸本が伝わっている。導入部で扱う覚一本等の語り本系諸本は、総じて叙述が簡略化されている。本文量が多く、様々な関係記事をも物語内に取り込む、いわゆる読み本系諸本から、叙述を抄出したり、要約したりすることで、語り本系諸本の本文は形成されているのである。

授業の展開部においては、語り本系諸本では省略される、得長寿院造営に伴う開眼供養の様子について、生徒たちに読み本系諸本を教材として提示する。現在の研究状況では、『平家物語』諸本に関する体系的解説を端的に述べるのは困難であるので、本授業ではできるだけ単純化した把握を前提に進めることを提言したい。諸本中、最古の書写奥書を有する延慶本を古態テキストとして扱い、諸本中、もっとも大部な本文量を有する源平盛衰記を、増補された後次のテキストとして扱う、という把握である。（注8）覚一本については、ちょうど両者の中間的位置にあるものと認め、次節以降、諸本の比較作業に移っていききたい。

#### 4 展開（１）—延慶本『平家物語』該当場面の読解

展開（１）においては、延慶本の当該記事を取り上げる。教材としては、かなりの長文となるので、事前に次のような見出しを付けて配布するなど、生徒たちが内容の見通しを付けやすいようにするなど、工夫が必要であろう。

## 延慶本 第一本二「得長寿院供養事付導師山門中堂ノ葉師之事」

## A【平忠盛による得長寿院造営】

忠盛朝臣、備前守たりし時、鳥羽院の御願、得長寿院を造進し、三十三間の御堂を立て、一千一体の聖観音を安置し奉る。中尊は丈六、等身は千体なり。よって天承元年三月十三日、吉日良辰をもって、供養を遂げをはんぬ。＊

## B【開眼供養の導師選任にあたって】

御導師には、天台の座主と御定めあり。しかるに、いかなる事にかおはしけむ。座主、再三辞し申させ給ふ間、「さては誰にてか有るべき」と仰せあり。その時、所々の名僧、寺々の別当、望み申すところ、十三人也。浄土寺の僧正実胤、同別当道忠僧都、興福寺の大臣法眼実信、同寺の大納言法印成運、御室の御弟子祐範上人、園城寺の権大僧都良円、同じく智覚僧正、東大寺の大納言法印隆鑊、花山の僧正覚雲、養尾の法眼蓮浄、兵部卿僧都祐全、宇治の僧正寛深、桜井の宮聖人円妙、以上十三人。この智徳達は、皆法皇の御外戚、あるいは法皇の御師徳、あるいは法皇の御祈禱所の満徳なり。＊「われこそ天下一の名僧よ」「われこそ日本無双の唱導よ」と、おのおの驕慢の幡幢をたてて望み申させ給ふもことはりなり。

「げにも、天台座主のほかは、この人々こそ器量よ」と、法皇も御定あり。さればおぼしめし煩ひてぞ渡らせ給ひける。毎日に公卿僉議ありけれども、さして誰とも定まらず。「さらば孔子に取るべし」とて、かの禅侶等をみな徳長寿院に召されたり。ゆゆしき見物にてぞありける。さて孔子の次第は、十三の内の一には「御導師たるべし」と書いて、余の十二は物も書かず、白孔子なり。法皇の仰せに、「まろが現当二世の大事、ただこの仏事にあり。もしまことの導師たるべき器量の人、この十三人のほかにてなほやあるらん。冥の照覧知りがたし。されば今一つを加へて十四の孔子になすべし」と云々。よって御定に任せて十四にして、十三人寄りて面々に取り給ふに、みな白孔子を取りて、「御導師たるべし」といふ孔子は残りたり。「冥の照覧、まことに様あるべし」と仰せあり。十三人の智徳、おのおの宝の山に入りて、手を空しくして帰り給へり。

## C【意外な人物が導師に決定】

その後、法皇、「この人々のほかに誰あるべしとも覚えず。ただ願はくは、必ずしも智者にあらず、能説にあらずとも、種姓下劣なりとも、心に慈悲ありて、身に行徳いみじく、天下一番に貧しからむ僧を導師に用ゐばやと思ふはいかに」と仰せあり。公卿未だ御返事申されざるところに、蓑笠着たる者の、門前に臨みたり。奇しく御覧ずるところに、蓑笠をば唐居敷に指し置き、黒き衣・袈裟懸けたる僧一人、老々として、法皇の御前に参りて、「まことにや候ふやらん。得長寿院供養の御導師には、無智下賤なりとも心に慈悲有りて、身に徳行あらん貧僧をめさるべしと承はる。愚僧こそ慈悲と行徳とは欠けて候へども、貧窮の事は日本一にて候へ。真実の御事にて候はば、参るべくや候ふらん」＊法皇、「さてはまめやかに無縁貧道の僧にこそあむなれ。不便なり。御導師に定めおぼしめすところなり。来る十三日の午の時以前にかの御堂に参るべし。」と御定あり。僧、涙をはらはらとこぼして、手を合はせて法皇を拝みまゐらせて、蓑笠取りて、うち着て罷り帰りけり。＊

#### D【貧僧の正体】

すでに御供養の日、＊吉日は十三日、良辰は午の時なり。以前に御幸もなり、行幸もなりぬ。女房、男房、すべて雲の上の人々、みな参り給へり。いかにいはんや都鄙遠近の貴賤上下の諸人、幾千万といふことを知らず参り集まり、件の御導師もすでに臨み給へり。＊まことに羸弱たる体、諸人皆目を驚してぞ侍りける。導師、すでに高座に登り給へば、膝ふるひわななきて、法則の次第も前後不覚に見えたり。しばらく有りて、勸請の句をはたと打ち上げ給ひたりければ、三十三間をひびきめぐり、一千一体の御仏も納受をたれ給ふらむとぞめでたかりける。表白まことに玉を吐き、説法いよいよ富楼那の弁舌あり。聴聞集会の万人、随喜の涙を流して、無始の罪障を濯ぎ、見聞覚知の道俗は歓喜の袖をかいつくろひて、即身の菩提を悟る。＊御説法ながくして三時ばかりありけるを、法皇は刹那の程とおぼしめされける。すでに廻向の金を鳴らして、高座より下りて、正面の左の柱の本に居給へり。＊御導師、すでに帰り給ひけるに、聴聞の衆、庭に多くして、出させ給ふべき様も無かりければ、御堂の正面より虚空を飛び上がりて、惣門の上に暫くをはしましけり。二人の従僧は日光・月光、光をかがやかし、十二人の下僧は薬師の十二神将なり。叡山中堂の伊王善逝にてぞましましける。世すでに末代たりといへども、願主の信心清浄ならば、仏神の威光、なほもつて嚴重なり。

#### E【先例（東大寺大仏開眼供養）との比較】

聖武天皇の御願、東大寺供養の御導師は行基菩薩と御定有りけるに、行基堅く辞し申させ給ひける様は、「御願大仏の事なり。小国の比丘ふさはしからず。靈山浄土の同聞衆、婆羅門尊者と申す大羅漢、今に天竺にあり。迎へに遣はすべし」とて、宝瓶に花をたて、闍伽折敷に居へて、難波の海に置き給ひければ、風も吹かざるに、闍伽折敷流れて西をさして行く。七日を経て後、供養の日、かの婆羅門尊者、闍伽折敷に乗りて、難波津に來たりて、大仏殿をば供養じ給ひにき。それをこそ奇代の不思議と承るに、これはなほ勝れたり。

さてかの婆羅門尊者、南天竺より難波の浦に到来の時、行基菩薩対面して宣はく、  
靈山の釈迦のみまへに契りてし真如くちせずあひ見つるかな

婆羅門尊者の返事

迦毘羅衛の苔の筵に行き逢ひし文殊の御顔またぞ拝する

＊かの歌の心にて、婆羅門僧正は普賢、行基菩薩は文殊なり。今、この得長寿院をば、中堂の薬師如来、日光・月光等の二菩薩を従僧とし、十二神将等を眷属として御供養あり。遙かに昔の聖跡よりも当伽藍の効験は勝れ給へりと、万人みな讃め奉るところなり。

原文は、さらに長文であるが、読解上、差し支えない叙述については省略し、その箇所には「＊」を付しておいた。次に、A～E各節の内容を要約すると以下の通りとなる。

#### A【平忠盛による得長寿院造営】

覚一本傍線部の内容とほぼ同じ。

#### B【開眼供養の導師選任にあたって】

得長寿院開眼供養の導師は、時の天台座主と定められたが、どうしたことが、座主はそれを固辞する。これによって、各宗各寺院の錚々たる高僧たち十三人が、自らの資質を誇示して名乗りを上げる。思い悩んだ院は、僧たちを得長寿院に集め、クジによって導師を決めることにしたが、万が一、十三人の他に適格者がいた場合のことを憂慮して、十四枚のクジを作成する。すると、十三人の高僧たちはみな白クジを引いてしまい、誰も登用されないことになってしまう。クジの結果は、冥界の神の意志と見なされ、その結果は尊重された。

#### C【意外な人物が導師に決定】

院は、日本一貧しい僧で、本当に優れた者に依頼したいと考えるようになる。そこに蓑笠に粗末な僧衣をまとった老僧が一人、現れる。老僧は自らの貧しさを日本一のものとして院に主張する。納得した院は、初対面の老僧に導師を務めるよう依頼した。

#### D【貧僧の正体】

供養の日を迎え、得長寿院は開眼供養に結縁しようとする人々で満杯になる。そこに例の老僧が、覚束ない足取りで登場し、よろよろと高座に登る。ところが、勤行が始まるやいなや、老僧の声は御堂に響きわたり、その後の説法では聴聞の人々を法悦の涙に暮れさせる。開眼供養が終わっても、感動した群衆が帰らず、老僧は寺を出ることができない。すると、老僧とお付きの二人の僧、下僧十二人は、御堂の正面から空へふわりと飛んでいった。老僧は延暦寺の本尊、薬師如来の化身であり、二人の従僧はその脇侍である日光・月光両菩薩の化身であったのである。

#### E【先例（東大寺大仏開眼供養）との比較】

かつて、東大寺大仏開眼供養が行われた際に、同じような例があった。開眼供養の導師には、聖武天皇によって、東大寺建立の立役者、行基が指名された。しかし、行基はそれを固辞し、大仏開眼供養に相応しい高僧、婆羅門尊者が難波の海に渡ってくると予言する。難波にて、行基が用意した閼伽折敷を海に流すと、七日後、婆羅門尊者が海の彼方から現れ、開眼供養の導師を勤めたという。それすら希代の不思議と伝えられたのだが、今回の得長寿院供養の奇跡は、東大寺大仏開眼供養に比べてずっと優れている。

また、行基と婆羅門の歌の贈答から、両者がそれぞれ文殊菩薩と普賢菩薩の化身であったと知られるのだが、今回の得長寿院供養では、延暦寺根本中堂の薬師如来が直々に貧僧に化身して導師を務め、日光・月光等の二菩薩が従僧となり、十二神将等も僧の姿で仕えている。はるか昔の出来事である東大寺大仏開眼供養よりも、今回の得長寿院供養における奇跡・効験の方がはるかに人々の賞賛を集めるべきものなのだ。

延慶本において得長寿院造営記事は、そのまま得長寿院供養記事へと展開している。覚一本等語り本系諸本は、こうした長大な記事から一部（造営記事）のみを切り取って簡略化し、「殿上闊討」記事の中に組み込んでいたのである。

延慶本の供養記事は、不思議と靈驗に彩られた魅力的な物語である。しかしながら、その一

方で、平安末期の宗教情勢が敏感に投影された内容でもある。当時の仏教界における一大勢力は、南都北嶺と称されるように、かつての都、平城京において鎮護国家の役割を担った東大寺・興福寺等、南都の寺々と、平安京遷都後に鎮護国家の聖地となった北嶺、比叡山延暦寺であった。延慶本の供養記事が、諸宗派、諸大寺の並み居る高僧たちを遙かに凌駕する延暦寺根本中堂の本尊、薬師如来の靈驗を誇示するものであることを、本文の読解から生徒たちとともに押さえておきたい。

その上で、E節において、東大寺大仏開眼供養の逸話が、あえて最後に引き合いに出されることの意味について、生徒たちに問題提起しておきたい。ここに東大寺大仏開眼供養記事（行基・婆羅門説話）が語られるのは、行基と婆羅門尊者の協働によって果たされた仏事の壮大さ、不思議さを説くためではない。本文・要約のいずれにも傍線を施しておいたが、これらの叙述に明らかなように、当記事の提示はあくまで得長寿院供養の靈驗のあらたかさを引き立てるためであった。両供養記事には、本来務めるべき導師が辞退したものの、思いもよらない存在が導師を代行して無事に仏事が勤まり、しかも導師を務めた人物は仏菩薩の化現であったと後から種明かしされる、という物語構造が共通している。しかしながら、得長寿院供養における化現の主が、東大寺大仏開眼供養における菩薩より格上の仏（如来）であり、それに諸菩薩・諸神までもが伴う、という点において、南都（東大寺）に対する延暦寺の優越性が示されているのである。

導入部において覚一本を読解した際、清盛以下平家一門の人々の栄華の基盤が、忠盛の功績によって築かれたと物語る上で、簡略ではあるが、得長寿院造営記事の持つ意味は大きいということを確認しておいた。『平家物語』諸本において、相対的な古態を示す延慶本の段階では、そうした物語的構想には、延暦寺根本中堂本尊である薬師如来、すなわち天台宗の効験を強調するという宗教的色彩が施されていたのである。物語の読者には、忠盛の得長寿院造営が、王権（院）の意志を実現させるものであっただけでなく、王による善行が仏（薬師如来）によって認められるほどの盛事でもあったことが認識されることになる。それは、仏法王法相依相即を前提とした世界観において、忠盛の事績がより大きく評価されることにも繋がるのである。語り本系諸本の場合、総じてこうした宗教的色彩は弱められる傾向にあるのだが、延慶本を参照することで、物語が本来有していた構想に目を向けることができるだろう。

## 5 展開（２）—源平盛衰記該当場面の読解

延慶本と対照的な様相を見せるのが、源平盛衰記である。覚一本や延慶本と同様、物語冒頭部において語られる得長寿院造営・供養記事は次のようなものである。

源平盛衰記 巻第一「平家繁昌並得長寿院導師」

忠盛朝臣、備前守たりし時、鳥羽院の御願、徳長寿院とて、鳳城の左、鴨川の東に、三十三間の御堂を造り進じ、一千一体の観音を居へ奉る。＊崇徳院の御宇、長承元年二月十六日に勅願の御供養あるべしと、公卿僉議ありて、同二十一日の午の一点と定められたりけるに、

その時刻に及んで、大雨大風ともに夥しかりければ延引す。＊度々延引の後、重ねて僉議あり。同年三月十三日、曜宿相応の良辰なりとて、その日の供養に定めらる。

御導師には、天台座主東陽坊の忠尋僧正と聞こゆ。期日に臨みて、一人・三公・卿相雲客、洛中辺土の貴賤上下、参り集まり、聴聞結縁しけり。当座主僧正は、<sup>いちのひと</sup>顯蜜兼学の法灯、智弁無窮の秀才なり。説法、舌やはらかにして、弁智の詞、なめらかなり。＊聴聞集会の万人は随喜の涙を流し、結縁群参の道俗は歓喜の袖を絞り、無始罪障の雲、消ゆるかと思ふ。＊説法は三時ばかりなりけるを、聴衆は刹那の程と思へり。まことに像法、時を転じ、医王善逝の化現か、また転法輪堂の<sup>てんぽうりん</sup>釈迦如来の説法かとあやまたる。

座主は高座より下り給ひ、正面の左の柱の本に座し給へり。法皇、御感の余りに、玉の御簾をかかげて、「＊汝の説法を聴くごとに、随喜の思ひ骨に徹し、信心身の毛よだって、落涙まことに押さえがたしと勅定あり。当座の歡嘆、山門の眉目なり。＊

異説に、二宮地主権現の、人にあらざるものに現じて、日光・月光・十二神将をあひ具して説法といふことあり。<sup>ひがごと</sup>僻事か。

やはり、得長寿院の開眼供養は、なかなか順調には始まらない。しかしながら、その理由は導師辞退によるものではなく、悪天候などによるものであった。ここに、延慶本が語るような意外性は希薄である。その後、改めて定められた日時に開眼供養が行われるが、その導師は当たり前のように天台座主忠尋が務めている。忠尋による説法は感動的なもので、高座からの辞去後、院から直接言葉を賜り、それは「山門の眉目」というべきものであったという。

盛衰記は延慶本の本文を参照して叙述を構成しているのだが、この記事については、全く内容を異にしている。得長寿院供養記事を延暦寺の面目のもとで語ろうとする姿勢自体は、延慶本にも通じる。しかし、ここには延慶本が語るようなドラマチックな展開も、神仏による霊驗も存在しない。盛衰記の記事は、同時代の史料等に確認されるような事実（注9）を中心に、淡々とした叙述によって構成されたものと評することができよう。事実として素晴らしいものであったらしい忠尋の説法自体は賞賛するが、それ以上の宗派的主張（延暦寺賞揚）がなされることはない。生徒たちには、両テキストのこうした対照性に気付かせておきたい。

また、一方で、やはり話末に付け加えられた「異説」の叙述（傍線部）にも注意を向けさせる必要がある。「僻事」として挙げられているのは、明らかに延慶本に伝えられる内容である。（注10）盛衰記の淡々とした叙述は、延慶本のような内容を知っていながらも「僻事」として採用しなかった結果なのである。

このような盛衰記編者の編集方針は、どのような価値判断に支えられるものであったのか。そのことを生徒たちに考えさせるためには、次に挙げる巻第二十四の記事を参照させる必要があろう。

#### 盛衰記 巻第二十四「南都合戦焼失」

東大寺と申すは、一閼<sup>えんぶだい</sup>浮堤、無二無三の梵閣、鳳<sup>ほうぼう</sup>薨高く聳えて、半天の空より抽んで、八宗の教法、広敷<sup>らんたい</sup>広学の僧庵、鸞台遙かに構へて、一片の霞を隔てたり。＊天平十七年に、土

木の造縁を始められしに、或ひは力士<sup>へんげ</sup>変化<sup>きた</sup>の牛、来って<sup>く</sup>材<sup>め</sup>を運び、或ひは久米の仙人、通力を起こして大木を飛ばし、或ひは雷神、盤石を砕きて船筏を下しき。＊

◎その後、大仏供養の御沙汰あり。導師、行基菩薩と定められたりけるを、菩薩奏して宣はく、「御願は大仏の事なり、我が身は小国の比丘なり。大会の唱導、更に相応せず。昔靈山浄土<sup>どうもんじゆ</sup>の同聞衆に大羅漢おはします。その名を婆羅門尊者といふ。南天竺にあり。来たりて供養をのぶべし」とありしかば、帝勅していはく、「天竺日本境ことなり。いかが招請せん」と仰せ下されければ、菩薩、その期に臨みて難波浦に行き向かふ。閼伽の折敷に花を盛り、香を焼き、海上に浮かべたり。西を指して流れ行く。暫くありて閼伽の備へも乱れずして難波浦に著く。小舟一艘、あひ副へり。舟中に梵僧一人あり。浜に上りたりければ、行基待ち受けて、手を取りくみ微笑して、歌を唱へていはく、

靈山<sup>りやうざん</sup>の釈迦のみまへに契りてし真如<sup>しんによ</sup>くちせずあひ見つるかな

梵僧返事して、

迦毘羅衛<sup>かびらゑ</sup>とともに契りしかひありて文殊<sup>もんじゆ</sup>の御顔<sup>みかほ</sup>あひ見つるかな

と返歌ありき。すなはち、天平宝字四年四月八日、御供養ありけるに、皇帝、忝なくも御自ら諸師請<sup>しやうじやう</sup>定の勅書を出されき。

同文ではないが、延慶本の東大寺大仏開眼供養記事（行基・婆羅門説話）と同内容の記事（引用本文◎以降）が、盛衰記にも存在するのである。しかしながら、その位置づけは延慶本とはまったく異なっている。盛衰記では、清盛の命によって南都に発向した重衡の軍勢が寺々を焼き滅ぼした事態、いわゆる南都炎上を語った後、被害を受けた東大寺諸堂舎の由来を語る東大寺の縁起的記事が展開される。行基・婆羅門説話は、そのなかに組み込まれているのである。引用本文◎以前に一部抜粋したように、盛衰記では、聖武天皇の御願によって建立の定められた東大寺が、様々な困難を克服し、また様々な靈験に彩られつつ、天平勝宝四年、ついに大仏開眼供養を挙げるに至る経緯が語られている。その文脈に位置する盛衰記の行基・婆羅門説話は、記念すべき供養の導師婆羅門尊者が、東大寺勧進を担った行基の言通り、天竺から現れたという奇跡の物語として語られているのである。

このような位置づけは、他の東大寺縁起諸文献にも共通しており、南都における宗派的立場からすれば、盛衰記は、行基・婆羅門説話を極めて正しく扱ったと評価されることにもなろう。前節における学習活動において、生徒たちは、延慶本の得長寿院造営・供養記事から、天台宗の効験を強調する意図を読み取っていた。本節における本文読解からは、同記事の内容改変、および行基・婆羅門説話の南都炎上記事への移動、という二つの観点から、延慶本的内容の継承を拒んだ盛衰記の編者が、南都の宗派的主張に沿う形で得長寿院供養記事を事実中心に書き換え、延慶本で比較対象として貶められた行基・婆羅門説話を再評価するために、当話をしかるべき別の歴史叙述の中に組み入れ直した、ということが確認されるであろう。

『平家物語』冒頭部の一記事、得長寿院造営・供養記事に注目して、三種類のテキストを対校しながら読み進めてきた。物語の背景にある宗教史的状況に対する三者三様の様相を、生徒たちにも理解させることができたのではないだろうか。こうした濃厚な宗教性こそ、中世文学

作品の一特性である。ごく初歩的な日本史的知識においても、平安後期から鎌倉期にかけての仏教各宗派の活発な動向は、生徒たちの頭にはあるだろう。そうした知識が、『平家物語』諸本三本の読解の上に生きてきたはずである。歴史や社会と文学、両者の有機的な関係に気づけたならば、それだけでも本授業案の目的の大半は達成されたことになるう。

ただ、もし時間的余裕があるならば、生徒たちには延慶本に語られた得長寿院供養記事の背景にある伝承世界に、もう一歩迫ってもらいたい。次節では、展開（3）として、関係する伝承をいくつか紹介し、解説しておきたい。

## 6 展開（3）一行基説話・鯖売り翁説話の読解

そもそも、延慶本の語る得長寿院供養記事については、他の説話集や寺院縁起類に同内容の記事が載せられる例が他にはない。中世伝承世界においては孤立的な伝承であると言ってもよいだろう。それに対して、延慶本が比較対象として引用した行基・婆羅門説話は、院政期成立の『今昔物語集』など、多くのテキストに引かれる周知の伝承であった。

『今昔物語集』巻第十一「婆羅門僧正、為値行基、従天竺来朝語」第七

今は昔、聖武天皇、東大寺を造りて、開眼供養し給はむとするに、その時に行基といふ人あり。その人をもって講師とし給ふに、行基申していはく、「我その事に足らず。今外の国より講師を勤むべき人来るべし」と申して、講師迎へむがために、天皇に奏して、百の僧を曳き具して、行基は第百に立ちて、治部玄番を卒し、音楽を調のへて、摂津の国の難波の津に行きぬ。見るに、さらに来る人なし。その時に、行基、一前の閼伽を備へて海の上に浮かべ放つ。その閼伽、波のために乱れ破る事無くして、遙かに西を指して行く。その閼伽、船の前に浮かびて返り来たり。＊行基、兼ねて知りて、迎へ給へるなり。婆羅門、船より陸に下りて、行基と互ひに手を取りて、喜び給ふ事限りなし。遙かに天竺より来たれる人を日本の人の待ち受けて、本より見知りたるが如く、睦び語らふ事、奇異なりと人みな思へるに、行基、歌を奉り給ふ。

霊山の釈迦のみまへにて契りてし真如くちせずあひ見つるかな  
婆羅門の返歌

毘毘羅衛にともに契りしかひありて文殊の御顔あひ見つるかな  
これを聞きて、みな人、行基菩薩は早く文殊の化身なり、といふ事を知りぬ。その後、行基、婆羅門を迎へて来たり給へり。天皇、喜び貴とび給ひて、この人をもって講師として、思ひの如く東大寺に供養し給ひつ。婆羅門僧正といふ、これなり。

授業における取り組みとしては、延慶本・盛衰記とそれに先立つ『今昔』の行基・婆羅門説話を語彙レベルの異同も含めて比較検討し、伝承の流布と変容について分析するという方法もありえるだろう。本授業案における主軸からは逸れるが、グループ学習などに適した課題設定である。例えば、行基と婆羅門の間でやりとりされる和歌の表現にも色々と異同がある。それ

ぞれの異同について、生徒たちの自由な発想力で、どうしてそのような変化が起こったのかを想像し、その過程を論理的に説明できたならば、充実した成果が得られるであろう。

こうした取り組みに手が回らない場合でも、『平家物語』諸本の外側に、行基・婆羅門説話が様々に伝えられていたと知るだけでも意味がある。天台の宗派的立場を主張するために引き合いに出される素材は、それがよく知られたものである方が、より効果的であるからである。行基・婆羅門説話の伝承の広がりを知ることは、古典の時代の人々が、延慶本の得長寿院供養記事を読んだ時に感じる驚きや衝撃の大きさについて、現代を生きる私たちが想像力を働かせるための一助ともなろう。

また、延慶本の得長寿院供養記事については、南都東大寺の開眼供養に纏わる逸話として行基・婆羅門説話とはまた別に伝えられた鯖売り翁説話を換骨奪胎したものだ、という指摘がある。（注11）『今昔物語集』によって、その梗概を示すと次の通りである。

『今昔物語集』巻第十二「於東大寺行華嚴会語」第七

東大寺開眼供養における講師（法会における経論の論説を担当）に婆羅門僧正が決まったが、読師（教典の読誦を担当）が未定であった。聖武天皇は夢に、開眼供養の朝、最初に寺の前を通った者を、誰彼選ばずに読師にすべきと告げられる。当日、最初に通りかかったのは、背中に鯖を入れた籠を背負った老翁であった。帝は、有無も言わず、翁を読師として高座に上げる。その後、開眼供養は順調に進み、終わった瞬間、翁は高座の上から忽然と姿を消す。高座に残された籠を見ると、鯖はすべて華嚴経八十巻に変化していた。これにより、毎年、この日に東大寺では華嚴会が行われることになった。今でも、翁が籠を背負うのに用いた杖は、御堂の東に突っ立てられたままである。

行基・婆羅門説話と同様、この鯖売り翁説話も、中世の伝承世界においてよく知られた伝承であった。その一例として、『宇治拾遺物語』所収の説話を次に引いておこう。

『宇治拾遺物語』 卷第八第五 「東大寺華嚴会の事」

これも今は昔東大寺に恒例の大法会あり。華嚴会とぞ云ふ。大仏殿の内に高座を立てて講師のぼりて堂の後より掻い消つやうにして逃げて出づるなり。

古老伝へて曰く、御堂建立の始め、鯖売翁<sup>さばうりのをきな</sup>来たる。ここに本願の上皇、召し留めて大会の講師とす。売る所の鯖を経机にし置く。変じて八十華嚴経と成る。即ち講説の間、梵語をさへづる。法会の中に、高座にして忽ちに失せをはりぬ。

また曰く、鯖を売る翁、杖を持って鯖を荷ふ。その鯖の数八十、則ち変じて八十華嚴経<sup>はり</sup>と成る。件の杖の木、大仏殿の内、東回廊の前に衝き立つ。忽ちに枝葉をなす。これ白榛の木なり。今、伽藍の栄え衰へんとするに従ひて、この木栄え枯ると云ふ。かの会の講師、この比までも中間に高座より下りて、後戸より掻い消つやうにして出づる事、これを学ぶなり。かの鯖の杖の木、三十四年がさきまでは葉は青くて栄えたり。その後なほ、枯木にて立てりしが、この度平家の炎上に焼け終りぬ。世の末ぞかしと口惜しがりけり。

鯖売り翁説話の類話は、他に『東大寺要録』巻二・『建久御巡礼記』・『古事談』巻三等にも見出される。これらのうち、いくつかのテキストでは、「古老伝云」とあり、書承テキストのみならず、古老の語りや聖の唱導などを通じて、口語りによっても広く流布した伝承なのである。

鯖売り翁説話と延慶本の得長寿院供養記事とは、見知らぬ貧しい老人が巻き起こす奇跡の物語である点、忌避されるべき存在が聖なるものの化身であった点等々、説話の主要要素が相似する。延慶本、あるいは延慶本が前提としたテキストが、この鯖売り翁説話を換骨奪胎しておきながら、一方で比較対象として、同じ東大大仏開眼供養に纏わる行基・婆羅門説話を引用したのならば、それはかなり大胆で、手段を選ばぬ所行ともいうべきであろう。その背景には、天台至上主義ともいうべき宗教的思想信条に裏打ちされた、南都の宗教的権威に対する対抗意識が見て取られる。『平家物語』諸本は、いずれも無署名の歴史叙述であり、諸本の編集は匿名の編者（たち）によってなされていく。だからこそ、時には露骨な宗教的主張が潜み込まれると言ってもよい。物語の享受者が、無意識のうちにそうした主張に触れ、感化されることが期待されてもいるのである。『平家物語』の叙述の上に、時に、極端な宗派的主張が展開される所以である。生徒たちには、中世の古典文学生成（変容）の動機のひとつとして、こうした宗教史的力学が働く場合があることを知ってもらってよい。ある作者が読者の感動を期待して文章を紡ぐ、といった単純素朴な文学観から離陸する足がかりとなることであろう。

## 7 総括一物語の背景にある史実に目を向けて

本授業案最後の取り組みとして、生徒たちの用いる「日本史」教科書を通じて、歴史的事実の確認をしておきたい。ある「日本史」教科書には、次のような解説がある。

『詳説日本史 改訂版』山川出版社（2010年3月）

### 第4章「中世社会の成立」1「院政と平氏の台頭」

#### 「院政期の社会」（p82）

大寺院も多くの庄園を所有し、下級僧侶を僧兵として組織し、国司と争ったり神木や神輿を先頭に立てて朝廷に強訴して要求をとおそうとした（注）。神仏の威を恐れた貴族は、大寺院の圧力に抗することができず、武士を用いて警護や鎮圧にあたらせたため、武士の中央政界への進出を招くことになった。

（注）興福寺の僧兵は奈良法師とよばれ、春日神社の神木の榊をささげて京都に入って強訴し、延暦寺の僧兵は山法師と呼ばれ、日吉神社の神輿をかついで強訴した。興福寺・延暦寺を南都・北嶺という。鎮護国家をとнаえていた大寺院のこうした行動は、法によらずに実力で争うという院政期の社会の特色をあらわしている。

『平家物語』諸本における得長寿院造営・供養記事を読解した後に、こうした解説を読んだ場合、そうでない場合に比べて、中世（院政期）社会における政治と宗教との関係について、

より実感的な把握が生徒たちに可能となるであろう。政治と宗教という「事実」を理解する上で、『平家物語』という「文学」教材が果たす役割は小さなものではない。「感動」を主眼とした狭義の「国語」教材観に縛られるだけでなく、『平家物語』というテキストからも、もっと多様な内容が、生徒たちに教材として提供されてよいだろう。歴史を理解するための古典文学作品読解、古典文学作品の文学的特質を理解するための歴史的事実の把握、そうした双方向的な授業展開の試みが、本授業案の実践を契機に、継続的になされてよいかもしれない、

さて、得長寿院造営・供養記事に、『平家物語』が舞台とする時代の思想的背景を映し出されていることが確認されたならば、教授者からは再び、次の『平家物語』の一節を紹介してもよいだろう。

『平家物語』巻第一「願立」<sup>がんだて</sup>

「賀茂河の水、双六<sup>さい</sup>の賽、山法師、これぞわが心になはぬもの」と、白河院も仰せなりけり。

## おわりに

『平家物語』諸本には、本授業案で取り上げたような天台・南都（南都北嶺）の宗教的主張ばかりが見出されるわけではない。真言的立場もしかり、院政期から中世にかけて人気を博した熊野信仰、およびそれを領導した天台宗園城寺派もしかり、他にも浄土宗、時宗に通ずる念仏信仰等々、極めて多様な中世宗教史的言説が物語のなかに雑多に同居しているのである。

物語は、一族の存亡をかけた合戦をひとつのクライマックスとして、そこに至る経緯、時間軸に沿って語り進められていく。しかしながらその一方で、進行する物語の随所には、中世の宗教的状況との深い関わりが描き込まれてもいる。『平家物語』諸本間で大きく叙述内容が異なる場合があることは、比較的よく知られていようが、本授業案で取り上げたように、宗教的色彩の強い記事の内容や改変に関しては、ある程度、具体的な思想背景が見いだされることも少なくない。得長寿院造営・供養記事に限らず、本授業案のような取り組みは、『平家物語』における他の様々な場面からも可能であろう。

冒頭にも記したように、高等学校「国語」や「古文」の教科書で取り上げられる『平家物語』の記事の多くは合戦場面であり、生徒たちの『平家物語』に対する印象や認識も、それらを通じて形成されがちである。むろん、そうした扱いは、軍記物語というジャンルの"特色"を端的に示す、という点において評価されてもよい。ただし、生徒たちがそうした教科書経験を通じて、『平家物語』の全体もそうであるかのように、固定的に考えてしまうことは回避されるべきであろう。大学の日本文学専攻などに入学しない限り、『平家物語』全巻を通読するような機会は、一般的にはなかなかありえまい。だからこそ、本授業案が試みたように、作品世界の広がりを実感できるような場面を、それがいわゆるマイナーな場面であっても取り上げ、学習の意義を明確にしながら、生徒たちに取り組んでもらう必要性もあるのではないかと考えている。

〔註〕

- (1) いずれも2009年3月、文部科学省刊
- (2) 牧野和夫氏「延慶本『平家物語』の一側面」(『藝文研究』36 1977年3月)以降、『中世の説話と学問』(1991年11月・和泉書院)、『延慶本『平家物語』の説話と学問』(2005年10月・思文閣出版)、『日本中世の説話・書物のネットワーク』(2009年12月・和泉書院)各著書にまとめられた諸論考。
- (3) 牧野淳司氏「延慶本『平家物語』高野御幸説話の背景」(『巡礼記研究』2 2005年9月)、「中世東大寺縁起の諸相—寺院間の相論あるいは唱導と『平家物語』—」(隔月刊『文学』4-6 2003年11・12月)、「延慶本『平家物語』と寺社の訴訟文書—寺院における物語の生成と変容—」(『中世文学』2007年6月)、「延慶本『平家物語』における歴史物語の構築—寺院が発信する歴史認識との比較を通して—」(武久堅編『中世軍記の展望台』2006年6月・和泉書院刊)等。
- (4) 拙稿『『平家物語』と天台系観音信仰寺院—粉河寺・勝尾寺をめぐる—』(『日本文藝研究』51-4 2000年3月)、『『平家物語』における仏法的立場の表出—延慶本・源平盛衰記を例として—』(『四天王寺国弘教大学紀要』人文社会学部37 2004年3月)、「『一念弥陀仏』偈の受容層—『平家物語』が語る〈法然による重衡救済物語〉の位相を考えるために—」(佐伯真一編『中世の軍記物語と歴史叙述』2011年4月・竹林舎刊)、『『平家物語』の諸本展開と寺門派修験—平家享受の場との交渉を視野に入れつつ—」(川崎剛志編『修験道の室町文化』2011年6月・岩田書院刊)等。本稿の授業教材は、上掲第2論文において扱った事例による。
- (5) 得長寿院造営・供養記事について論じた代表的な先行研究としては、渥美かをる氏「延慶本平家物語の特殊な性格—ぬきさしならぬ重要な説話の存在について—」(『軍記物語と説話』1979年・笠間書院 初出1974)、水原一氏「堂供養説話の考察」(『延慶本平家物語論考』1979年・加藤中道館 初出1978年、名波弘彰氏『『平家物語』に現れる日吉神社関係説話の考察—中世日吉神社における宮籠りと樹下僧—』(『文芸言語研究』9 1984年2月)、同氏『『平家物語』の成立圏(機内)』(軍記文学研究叢書5『平家物語の生成』1997年・汲古書院)等。
- (6) 「三十三間の御堂」という表現から、生徒たちには現存する「三十三間堂」が想起されるかもしれない。現存の御堂の正式名称は蓮華王院であり、得長寿院ではない。得長寿院の先例にならって、後白河院の発願により平清盛が造営を担った御堂である。その点、混同のないよう留意したい。
- (7) 昭和三十年代に岩波書店が刊行した「日本古典文学大系」において、『平家物語』の底本に覚一本が採用されて以来、教科書に載る本文には、覚一本、あるいはこれに近似する語り系諸本が採用されるようになった。文学系・歴史学系のエッセイ等でも、『平家物語』が扱われる場合は、たいてい覚一本系である。本稿における引用は、新編日本古典文学全集(小学館)による。当シリーズには現代語訳が付いている。
- (8) 延慶本『平家物語』のテキストとしては、十二分冊にて刊行された『校訂 延慶本平家物語』(一)～(十二)(汲古書院)が最新の成果である。また、釈文と注釈の施されたテキスト『延慶本平家物語全注釈』(汲古書院)が第三本(巻六)まで刊行されている。口語訳の付されたテキストは刊行されておらず、本稿の本文は『校訂』に基づきつつ、教材として適切性を勘案して、送りがなや用字等、改めている。以下、引用する諸作品の本文についても、同様の処理を施している。また、「源平盛衰記」のテキストとして、比較的入手しやすいものには『新訂源平盛衰記』(新人物往来社)がある。現代語訳には、『完訳源平盛衰記』(勉誠出版)がある。
- (9) 同時代史料の一例として、『中右記』を挙げておく。

『中右記』長承元年(1132)三月十三日条

今日千体観音堂供養可被行也、(中略)引頭権少僧都定海源覚率衆僧、着左右座、次又迎導師呪願

等発楽（河曲子）、此間遅、相尋之处、導師遅参者、頻被催、導師法印権大僧都忠尋（山座主也）、  
呪願権僧正覚猷、乗輿到舞台東辺、下従輿、就礼盤礼仏、

- (10) 盛衰記本文に「人にあらざるもの」とある表現は、本来「非人」であるが、人権上、扱いに留意すべき表現であるので、本稿で提示する教材では誤解を招かぬよう表現を改めている。また、延慶本での薬師如来が、盛衰記では「二宮地主権現」とされるが、二宮地主権現の本地仏は薬師如来であり、脇侍も「日光月光」であるので、両者の相違について本稿では特に問わない。
- (11) 阿部泰郎氏「唱導と王権―得長寿院供養説話をめぐりて―」『伝承の古層―歴史・軍記・神話―』（1991年・桜楓社）

